

エチエンヌはジッドの「いところ」なのか

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/20568>

出版情報 : Stella. 30, pp.315-321, 2011-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



エチエンヌはジッドの「いところ」なのか

吉 井 亮 雄

パスカル・メルシエとピーター・フォーセットが共同で編纂・校訂した『三声の書簡集』（2004年刊）は、アンドレ・ジッド、ポール・ヴァレリー、ピエール・ルイスという19世紀末の「文学青年トリオ」の交流を証し立てる、まさに記念碑的な業績である¹⁾。総計1,421通の書簡を収録したこの大冊によって初めて明らかになった実証的事実は枚挙にいとまがなく、もはや同書への参照を抜きにして当時の知的青年層の精神風土は語りえないほどである。たしかに校訂者たちが「不詳」とせざるをなかった註や、小さな記述ミスは皆無とはいえないものの、資料体全体の完成度の高さを思えば、ひとつふたつの瑕瑾が見いだされたからといって、その学術的な価値はなんら損なわれるものではない。したがって本来ならば、個々の不明点にかんしては代替の註を提示すれば事足りるところであろうが、小論では周辺的情報の提示をかね、文献調査のサンプルとして、ひとつの具体的な作業経過を報告したい。この点について、あらかじめ大方のご了解を乞う。

1890年の秋、ジッドとルイスとのあいだでは以下のようなやりとりが交わされる。まずは10月2日付のルイス書簡――

僕のいとこのルネ〔マルダン〕が、『ル・プチ・パリジャン・イリュストレ』紙に君が載せた詩をこのカードに貼って送ってきた。最初は署名しか見ておらず、てっきり勘違いだろうと思っていたが（じっさい、どうしてエチエンヌなんて名のったかね）、最初の数行を読むや、すぐに君のものだと分かった。いつだって君の詩はそれと分かる。たとえ千篇のソネのなかからでも、どれが君のか僕には見分けがつくだろう。だがこのデビュー（だって、まさにこれはデビューだろ？）を隠しておくとはけしからん。とてもいい詩だけになおさらだ。僕の知らぬ間に君はずいぶん腕をあげたな。去年のものよりこっちのほうがずっと出来がいい。〔…〕²⁾

これにたいしジッドは3日後の返書で次のように答えている――

「…」エチエンヌ・ジッドは僕のいとこだ。君のいとこのルネは天使みたいな奴だな。
僕は感情がひどく高ぶっていて、君に何を書いているのやら、まるで分からない。
なんとか理解されたし。〔…〕³⁾

ここで話題になっている詩とその作者エチエンヌ・ジッドについて、書簡集校訂者はまず、詩篇じたいは『ル・プチ・パリジアン』紙の「挿絵入り文芸付録」1890年9月28日号に掲載された24行詩「失われた小径」だと注記し、その第1ストロフを引用しているが、いっぽう作者にかんしては次のように記さざるをえなかった——「我々はこのジッドのいところについては何ら手がかりを得ることができなかった。おそらくはジッド一族のうちニームの系統に連なる人物であろう」⁴⁾。

かつて『三声の書簡集』を通読したさい、筆者にとっても当該箇所は気にかかる場所であったが、その後なかなか本腰を入れて調べるにはいたらなかった。だが最近になって、同書簡集の日本語部分訳を準備中の山田広昭・東京大学教授からお問い合わせをいただくことがあり、それが今回の調査のきっかけとなったのである。氏のお尋ねは、そもそもエチエンヌ・ジッドは架空の人物ではないのか、したがってそれを「自分のいところ」と呼ぶのもジッドの嘘なのではないのか、というものであった。上述のように書簡集の編纂・校訂では最高度の技量を有するメルシエ、フォーセツト両名が探索を尽くしても同定できなかったものを、筆者が即座に回答できるはずはない、そう氏にはお断りしたうえで、暫定的な意見として次をお伝えした。すなわち、少なくとも問題の詩篇そのものはジッドの作ではあるまいという点である。ジッドによる偽名の使用としてこれまでに確認されているのは、短命の学生同人誌『ボタッシュ＝ルヴュ』(後に『地の糧』を献じられるモーリス・キヨが主宰)にザン＝バル＝ダールの筆名で書いた短詩「雨色の6行詩」(1889年2月)と、これと同時期にはすでに発案されていたアンドレ・ワルテル名をもちい、91年から翌年にかけて発表された『手記・詩』だけである。後者については当時ジッドが心酔・愛読していたゲーテの「ウエルテル」を擬したものだが、プレノンに自分の名を残したのは、もちろん従姉マドレーヌとの現実の関係を意識したためで(じじつ、数部のみ印刷された『手記』私家版には恋人の名はマドレーヌと記される。また公刊版でのエマニュエルという名もマドレーヌの頭文字に由来)、「遺作」と銘打ったことから明らかなように、一般読者による作者同定を意識したも

のではなかった。これにたいし問題の詩を発表するにさいし、当時はまだ歴とした象徴主義者だったジッドがブレノンだけを変え、本姓はそのまま残したとするならば、あまりにも芸のない筆名ということになろう……。

しかしながら以上はあくまでも推測の域を出ず、なんら確証があるわけではない。ジッドの文壇デビューが従来の通説よりも早まるのか否か、あるいはジッドと同世代の親族にそれなりの才能をもった詩人がいたのか否か、はたまたルイスとの関係の一側面を映すがごとく、書簡の記述は冗談やお巫山戯^{ふざけ}の類なのか否か。いずれにせよ大いに興味を引く問題であるだけに、さほど成算があったわけではないが、とりあえずは次回のフランス滞在での探索に先立ち、予備作業のつもりでゆるゆると調査を開始した。

まず取り掛かったのは掲載紙の概要把握であるが、幸先よいことに『ル・プチ・パリジアン』（1876年創刊）はフランス国立図書館のインターネットサイト「ガリカ」で参照が可能であった⁵⁾。同紙は第3共和制下の主要新聞のひとつで、1889年2月からは日曜版の「文芸付録」（8頁建、発売は土曜日）を発行した。「挿絵入り^{イリュストレ}」と銘打たれたのは、時事的な話題や著名人の肖像などを描いたエッチングが第1面（および時に最終面）を飾ったことによる。紙面の大半は小説や物語などの連載物が占めていたが、第8号からは「週ごとに歌をひとつ」と題する欄が設けられた（「失われた小径」が掲載されたのも同欄）。これを通覧して気づくのは、シュリ・ブリュドムやアルフォンス・ドーデ、フランソワ・コペ、エミール・オージェ、クロヴィス・ユークをはじめ、ほとんどが著名な詩人・文学者の作だという点。このことからして、いまだ無名の青年詩人に自作発表の機会が与えられたとはいかにも考えにくい。とりわけ筆者が注目したのは、没してすでに20年近くがたつテオフィル・ゴーチエの詩篇が再録されていることである（1890年12月14日号）。物故者の旧作も対象外ではない……。そこからひとつの可能性に思いあたった。

2年ほど前にフランスで行われた古書の競売で、スイス・ロマンズの詩人たちの著作50点ほどが一揃いで出品されたことがあったが⁶⁾、そのなかにジッド姓の人物による詩集が含まれていたのを思い出したのである。筆者がこれを記憶にとどめていたのは、詩集の発行年がアンドレ・ジッドの生年と同じ1869年だったことにもよる。コレクションは筆者旧知のパリの古書店が落札し、その後1冊ずつバラで販売していたが、今回あらためて競売カタログを確認してみ

ると、上記詩集の著者は「D = エチエンヌ・ジッド」。同書が問題の詩篇を収めるのか否か確信はなかったが、国立図書館をはじめフランスのどの公共機関にも収蔵されておらず、各種の古書サイトを見わたしてもこの1冊しか売りに出ていないとあって、迷うことなく発注した。現物が届くのを待ちながらインターネット検索を続けるうち、Hathi Trust Digital Libraryなるサイトが米国ウィスコンシン大学図書館所蔵本の画像データを提供していることが判明。早速ダウンロードし、期待を込めてページを捲ってゆくと、幸いなるかな、詩篇群のなかに「失われた小径」を見いだしたのである（その後まもなくパリからは典雅な装丁をまとった原書が届いたが、研究対象とする作家にいくぶんかなりとも繋がると思っただけに、この稀少本を手元における喜びは大きかった）。まずは刊本の提示する詩の全文を掲げておこう⁷⁾ ——

LE SENTIER PERDU.

Musique de Fr. Grast.

C'était un frais sentier, plein d'une ombre amoureuse.
On n'y passait que deux en se donnant la main ;
Nous le suivions ensemble en la saison heureuse,
Mais je n'ai pu dès lors retrouver ce chemin.

C'est qu'il faut être deux pour ce pèlerinage ;
C'est que le frais sentier n'a d'aspect enchanteur,
De gazons et de fleurs, de parfums et d'ombrage,
Qu'autant que sur son cœur on presse un autre cœur.

J'ai vu de hauts sommets et de riantes plages,
Aux pays merveilleux qui charment l'étranger ;
Des lacs unis et purs où passent les nuages,
Les bords où croît l'olive, où fleurit l'oranger...

Mais en vain j'ai cherché, sur cette heureuse terre,
À travers ses vallons, ses bois et ses sentiers,...
Je ne l'ai plus revu ce chemin solitaire
Où deux amants passaient le long des églantiers...

C'est que le frais sentiers n'est plus qu'une chimère,

Un songe, une ombre vaine, un souvenir chéri ;
C'est qu'après le bonheur vient la douleur amère,
Que la source était vive et que l'onde a tari...

C'est que la feuille tombe et que la flamme baisse,
Et que le passé mort est voilé d'un linceul ;
C'est que le cœur s'attache et qu'après il délaisse...
C'est que l'on était deux et que l'on reste seul !

詩集そのものは著者の死後まもなく遺された原稿群をもとに編まれたもので、甥の依頼を受けて旧友マルク・モニエが物したかなり長めの序文が付されている。この序文や他の情報源によれば、エチエンヌ・ジッド（正確にはダヴィッド＝エチエンヌ・ジッド）は1803年イタリアのボローニャに生まれたが、8歳の時に家族とともにスイスに移り住んだ。一時パリに留学し法学を修めたのち、故郷ジュネーヴで政治家・法律家として活躍。1869年、隠退生活を送っていた同市近郊シェヌ＝ブージュリーで没した。まとまった文学的著作としてはこの死後出版詩集が唯一のものである。

さて、序文には見逃してはならぬ重要な記述がある。「父方の先祖はナントの勅令廃棄後ジュネーヴへ逃れたフランス人」という指摘と、これに関連して付された次の注記がそれだ――

ラングドック地方出身のこの親戚筋は現在もフランスに残っており、これまで優れた司法官や法律家を輩出してきた。[...] 存命者のうちからは、最近受勲した才能溢れる画家 Th〔テオフィル〕・ジッド氏、また注目すべき法学書数点を著したパリ大学法学部教授 P・ジッド氏の名を引いておこう。⁸⁾

「パリ大学法学部教授」が作家の父ポールであることは言うまでもない。また、この父方の家系がラングドック地方ガール県ユゼスの出身であったのも周知の伝記的事実。記述の信憑性は高く、エチエンヌがアンドレ・ジッドと血縁のある人物だったことはまず疑えない。

さすれば、後者が前者のことを「僕のいとこ」と呼んだのは、あるいは「遠い親戚」(cousin éloigné) の謂だったのだろうか。すなわち、ジッド書簡の文言は実際にこの血縁のことを念頭においてのものだったのか。それとも、書簡のどこか投げやりな調子こそはルイスをからかった冗談のゆえなのか。残念な

がら現時点ではこれについて確言しうる証拠を見いだせない。法学者の父が同業のエチエンヌについて何らかを承知していた可能性は小さくあるまいが、この父を幼くして喪ったジッドが、彼あるいは母ジュリエットからどの程度のことを伝え聞いていたかとなると、まったく不明だからである。そもそもエチエンヌの文名は当時どの程度のものだったのだろう。リセ時代にすでに数千行の詩を誦んじていた早熟のルイスが名も知らないほどだから、パリ文壇で周知の存在だったとは考えにくい、せめて小論としては、この点にかんし若干の指標的事実を示して拙い調査報告の結びとしたい。

当該の文学史として今日最も定評があるパイヨ社版『スイス・ロマンド文学史』（全4巻、1996-99年刊）は、エチエンヌ・ジッドには一言も触れていない⁹⁾。だがその1世紀前に同じ出版社から出た『19世紀のスイス』第2巻（1900年刊）は、彼をジュネーヴ・ロマン主義の流れを汲む文人のひとりに数え、人々が愛誦しつづけるだろう詩の一例として、まさに「失われた小径」を挙げていたのである¹⁰⁾。ある時期まで母国ではそれなりに知られた存在であったのは間違いない。

「失われた小径」が彼の代表作となったのには、これに楽曲が付されていたことが与って大きい。『ル・ブチ・パリジアン』紙の「文芸付録」では欠けているが、先に全文を掲げた『詩集』刊本版では「Fr・グラストの音楽」と明記されている。グラストとは、やはりジュネーヴ在住でエチエンヌと同年の音楽家フランツ・グラスト（本名フランソワ・ガブリエル・グラ、1803-1871）のことで、刊本序文によれば「失われた小径」の音楽は彼が1840年頃に付けたものという¹¹⁾（ただし1879年にパリで出版された楽譜での題名は「小径」¹²⁾）。必然的に詩が書かれたのは同じ時期か、それ以前ということになるが、今日我々が手にしうるテキストとしては、これら『詩集』版と楽譜版、そして「文芸付録」掲載版の3種があり、句読法の微細な違いを別としても、たがいに数カ所で詩句の異同を見せる。その一例として、第2ストロフ最終行を上記の順で示そう（イタリック部分は『詩集』版との異文）――

- Qu'autant que sur son cœur on presse un autre cœur.
- *Que pour qui* sur son cœur *sent battre* un autre cœur.
- *Que si près de* son cœur on *sent* un autre cœur.

実際の年代順がどうであったかという確定困難な問題はさておき、これら3版間の小さからぬ揺れや、当初30年ほどはこれといった活字化の形跡がないことから推すに、詩は印刷されたかたちで一般読者の目に触れる機会は少なく、むしろ聴覚的なテキストとして頻繁に朗唱・歌唱され、その過程で次第に異文を生じていったのではないか。また詩の知名度がフランスではさほど高くなかったのも、そのような限定された流布形態に起因していたのではあるまいか。

註

- 1) André GIDE - Pierre LOUÏS - Paul VALÉRY, *Correspondance à trois voix (1888-1920)*. Édition établie et annotée par Peter FAWCETT et Pascal MERCIER, Paris: Gallimard, 2004. その後出版された『ジッド＝ヴァレリー往復書簡集』増補新版 (André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance (1890-1942)*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris: Gallimard, 2009) と合わせることで、ジッドら3者の書簡交換はほぼ完全なかたちで提示された。
- 2) *Ibid.*, p. 315.
- 3) *Ibid.*, p. 322.
- 4) *Ibid.*, p. 315, note 3, et p. 322, note 1.
- 5) 「ガリカ」では『ル・ブチ・パリジアン』紙とその「文芸付録」の画像データが2つの異なる整理番号 (NUMP-1592 / NUMP-9093) のもと、混在するかたちで提供されている。
- 6) Voir le catalogue de la *Vente Bibliothèque littéraire Albert-Louis Natural*, 7-8 décembre 2009 (Paris: Pierre Bergé associés), item n° 295.
- 7) *Poésies de D.-Étienne Gide. Souvenirs offerts à ses amis*, Genève: Imprimerie Jules-Guillaume Fick, 1869, pp. 18-19.
- 8) *Ibid.*, p. VI, note 1.
- 9) Voir *Histoire de la littérature en Suisse romande*, 4 vol., Lausanne: Éd. Payot, 1996-99.
- 10) Voir *La Suisse au dix-neuvième siècle*. Ouvrage publié par un groupe d'écrivains suisses sous la direction de Paul SEIPPEL, Lausanne: F. Payot / Berne: Schmid & Francke, t. II, 1900, p. 343.
- 11) Voir *Poésies de D.-Étienne Gide*, *op. cit.*, p. XXVI.
- 12) Voir Franz GRAST, *Le Sentier*. Mélodie pour mezzo sop. ou baryton. Paroles de Étienne GIDE, Paris: Richaut et Cie, [1879].